

「制限英語」の諸相^(*)

林 暢 夫

はじめに

英語には様々な姿がある。使用される国々によって、また一国内の地域によっても異なる姿をみせる。職業、身分などの社会階層による差異もある。さらに、自然言語としての英語の枠内で、使用語彙を一定の範囲に限定し、文法も単純化して特定目的のために供される英語もある。Basic Englishはそのような英語のいわば原型モデルであった。

本稿は Basic English の概略を述べたうえで、そのような特定目的のための英語として AECMA Simplified English, Plain English, VOA Special English などのいわゆる「制限英語」(Controlled English) を紹介し、若干の考察を加えるものである。

1. Basic English

英国の心理学者で言語学者であった C.K. Ogden (1889~1957) は1930年頃、それまでの言語研究の成果を踏まえて Basic English と称する新しい英語のシステムを発表した。これは自然言語である普通の英語の中から少数の基本語彙を厳選し、これにやはり普通の英語の文法から取り出した最少の規則とを組み合わせ合わせたもので、普通の英語のいわばエッセンスを抽出したような小言語体系であった。

もともと第一次大戦後の混乱期の政治的、文化的状況の中で、人々の使用することばが曖昧、不明瞭、また喚情的になりがちな風潮にきわめて批判的であった Ogden と、彼の熱心な協力者であった言語学者で文芸評論家の I.A. Richards (1893~1979) の二人はことばの意味の構造を明らかにし、ことばと思考の明晰性を追求することに強い熱意を持っていた。

二人は共同で事物やことばの意味とは何か、定義はどのような原則に基づくものかについて理論的な研究を続けていた。その過程で、様々な語の定義を試みる際に繰り返して使われる少数の特定の語があることに気づいたといわれる。繰り返して使われる少数の語があるということは、それによって大多数の他の語の意味を表すことができるということになる。

この発見は少数の要素的な語の組み合わせで多様な内容を伝えることのできる新しい伝達媒体、しかも普通の英語の枠内で普通の英語を簡素化した媒体の創造につながった。もともとは英語であるが、語彙の制限、文法規則の簡略化によって、英語が母語でない人々の利用に供する国際補助語、また、外国語としての英語学習者のためのワンステップとして利用できる言語を目指す Basic English が生まれたのであった。

Basic English は僅か850語の語彙と7か条の文法規則から成る。語彙の内訳と文法規則を列挙すると次のとおりである。

【語彙】

- | | |
|---|--------|
| (1) 事物語 (Things) | 600語 |
| (a) 一般語 (General) | (400語) |
| account, gold, rain, talk など | |
| (b) 具象語 (Picturable) | (200語) |
| apple, island, pig, window など | |
| (2) 作用語 (Operations) | 100語 |
| (a) 動詞 (Verbs) | (18語) |
| come, get, give, go, keep, let, make, put, seem, take ; | |
| be, do, have ; say, see, send ; may, will | |
| (b) 方向語 (Directives) | (20語) |
| about, across, after, against, among, at, before, between | |
| by, down, from, in, off, on, over, through, to, under | |
| up, with | |
| (c) その他(接続詞, 冠詞, 代名詞, 副詞, 疑問詞など) | (62語) |
| (3) 性質語 (Qualities) | 150語 |
| (a) 一般語 (General) | (100語) |
| able, good, like, round など | |
| (b) 反対語 (Opposites) | (50語) |
| bad, dark, short, thin など | |

【文法規則】

- (1) -sで複数形をつくる。
- (2) -er, -ing, -edで派生語をつくる。
- (3) -lyで副詞をつくる。
- (4) more, mostで比較を表す。
- (5) 倒置及びdoで疑問文をつくる。
- (6) 作用語と代名詞は活用形を持つ。
- (7) 度量衡の単位, 数詞, 通貨, 暦日, 各国語にほとんど共通の語(dance, beer など)は850語のほか使用可。

(ついでながら, Basic English の語彙及び文法規則一覧表のオリジナルには, 上記規則の「(1) -sで複数形をつくる」は Addition of 's' to things when there is more than oneと表されている。plural という語は Basic English には無いのである。)

語彙の縮小化は Basic English の利用の促進, また学習上の負担軽減のため重要である。縮小化を如何にして可能にしたかをみると, 基本的には, 語の意味を分析, 分解し, それを少数のきわめて平易な語で言い換える, あるいは説明するという方法が一つの大きな役割を果たしていることが分かる。動詞についてみると, Basic English は普通の英語にみられる多数の動詞を僅か 18 語に制限してしまった。この 18 語の基本動詞と事物語, 方向語, 性質語などを組み合わせることで多数の動詞の意味を表すことになる。

advance → go forward

ignore → give no attention to

promote → give a higher position to

また, 意味範囲の広い一般的な語で類義語の代替をさせるという方法もある。ただし, ニュアンスの違いは無視される。

cavity, crater, gap, pit → hole

cable, rope, twine → cord

cheerful, glad, satisfied → happy

bench, stool → seat

(特に区別する場合は a long hard seat, a seat without backとする。)

Basic English は語彙が少なく, ことがらを平易な語で表すという長所を持つ反面, 語数が少ないだけその使用頻度が高くなり, 従って意味範囲が拡大するため, 語のもつ印象が抽象的なものになりがちな欠点をも持っている。また, 熟語的表現が多いこと, 言い換え

表現がとかく冗長でまわりくどいことも指摘される。次の例〈1〉、〈3〉は普通の英語、〈2〉、〈4〉は Basic English に直したものである。(1)

〈1〉 *Look before you leap.*

〈2〉 *Take a look before you make a jump.*
(あるいは、*Take a look before jumping.*)

〈3〉 *A bird in the hand is worth two in the bush.*

〈4〉 *A bird in the hand has the value of the two in the small trees.*

Ogden は心理学の評論雑誌に書いた論文の中で、リンカーンの有名なゲティスバーグの演説の Basic English 訳を紹介している。次の〈5〉が原文の一部、〈6〉がその訳である。(2)

〈5〉 *Fourscore and seven years ago our fathers brought forth upon this continent a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal. Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated can long endure. We are met on a great battle-field of that war.*

〈6〉 *Seven and eighty years have gone by from the day when our fathers gave to this land a new nation—a nation which came to birth in the thought that all men are free, a nation given up to the idea that all men are equal. Now we are fighting in great war among ourselves, testing if that nation, or any nation of such a birth and with such a history, is able long to keep united. We are together on the field of a great event in that*

war.

文学作品の Basic English 訳もいくつかあるようだが、次に引用するのはシェクスピアの有名なソネットを日本人の研究者が訳したものの最初の5行で、〈7〉が原文、〈8〉がその訳である。(3)

〈7〉 *Shall I compare thee to a Summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of
May,
And Summer's lease hath all too short a date:
Sometimes too hot the eye of heaven shines,*

〈8〉 *Am I to say that you are like a summer's
day?
You are more beautiful and more pleasing:
Rough winds make the sweet May flowers
come off unopened,
And summer's time for us is only very short:
Sometimes the heat of the sun is so great,*

言語活動には recognition (認識、理解) と production (表現、発表) の両面がある。Basic English で書かれたものを読んで理解するのは容易であるが、Basic English で表現するのはかなりの熟練を要する。普及を妨げた一因はそこにあるように思われる。

Basic English はその創案の当初より国際補助語としての機能を発揮することが期待されていたが、その面での普及はごく限られたものであったらしい。上述のことを含め様々な批判があったこと、また、自然言語としての普通の英語がすでに国際語的な性格を強め、相当の勢いを持つようになっていたことなどがその理由であろう。

日本へ Basic English が紹介されたのはこの言語システムが発表されたのとほぼ同時期のことである。当時の著名な英語学者、英語

教育関係者たちが、日本の主として中等教育における英語教育改善のために Basic English の考え方を取り入れようとして研究と啓蒙活動に相当の熱意を示した。批判も反対もあったが、一部の日本人教師は先導的な試みとして Basic English を教えたし、何人かの在日英国人教師も教え、その普及に尽力した。詩人で批評家のウィリアム・エンプソン (William Empson, 1906~1984) もその一人であった。1930年代後半、日英関係が疎遠になり、冷却化の方向に進むかにみえた時期に英国外務省が一種のいわば文化攻勢の一環として間接的に日本における Basic English の普及促進に力を注いだこともあった。

しかし、時代は英語教育に対してしだいに冷淡になり、やがて英語の時間数削減、英語教育全廃の主張まで現れるようになって、Basic English に対する関心は薄れていった。第二次大戦後に日本の英語教育界はアメリカの言語学に基づく教授法の大きな波に洗われることになり、その後 Basic English はほとんど注目されなくなる。ただし今日でも少数ながら Basic English の熱心な擁護者が研究と教育実践を続けているのも事実である。

国際補助語として生き残る可能性はあまり考えられず、英語教育の面でも教授法上の主流になることが期待できない Basic English は現在ではほとんど歴史的価値しかないのみなされることもあるが、あらゆる分野での普遍的な利用はともかくとして、特定分野に限定したいわゆる ESP (English for Special Purposes) の一つとしての枠ぐみを提供する点にその価値を認めることができるのではないか。近年になって産業界で Basic English をいわば原型モデルとしたと考えられる新たな言語体系の研究が始まった。次節ではこのことについて述べる。

できるだけ分かりやすく平易な表現を目指す Basic English の精神にはのちに述べる Plain English のそれと共通するものがある。

次の例は、ある掲示文とその Basic English 訳である。これは Plain English そのものと言ってもよいくらいである。〈9〉、〈11〉は原文、〈10〉、〈12〉はそのリライト文である。⁽⁴⁾

〈9〉 *Deposit litter in receptacle.*

〈10〉 Put waste in box.

〈11〉 Please *refrain from conversation with operator* while bus is in motion.

〈12〉 Please say nothing to driver while bus is going.

2. 「制限言語」, 「制限英語」

「制限言語」, 「制限英語」とはそれぞれ “Controlled Language”, “Controlled English” に対する仮の訳語である。一般的に認知された訳語はまだ無いかも知れない。近年、産業界では技術関係の文書の改善が大きな課題となってきた。産業の高度化で文書情報の内容が複雑になったこと、文書の流通が一企業内、一国内はもとより国際的にも著しく増大したことなどがその背景にある。理解しやすい良質の文書情報を流通させることが企業の競争力の強化につながるという認識が広まった。また、コンピュータによる機械翻訳の技術が進歩し、特定分野での実用化が現実のものとなると、機械に入力する言語のあり方の検討が必要となり、このことも制限言語の研究に拍車をかけることになった。

制限言語とは、自然言語の枠内で語彙、語法、文法、文体に一定の制限を加え、主として機械工業の分野における難解な専門的技術関係文書、例えば、機械製品の操作マニュアル、メンテナンス・マニュアルなどを読みやすく理解しやすくするために考案された一つの小言語体系である。ある範囲の特殊専門用

語は別枠とし、一般的な基本語彙をほぼ1000語から1500語程度に抑え、一語の品詞は一つ、意味も一つに限定、文型も単純なものに精選、また、文体上の一貫性、統一性をルール化することなどにより文書の良質化を図るのである。このような制限言語の発想の萌芽はすでに1960年代にみられるようだが、1970年になってアメリカのトラクター製造企業Caterpillar Tractor CompanyがCaterpillar Fundamental Englishを考案した。これに続いて様々な企業で制限言語の開発が進むことになる。制限の対象となる言語もまた多様である。言語が英語である場合は「制限英語」と総称する。次節で紹介するAECMA Simplified Englishはその代表格の一つであろう。

Caterpillar Fundamental EnglishはOgdenのBasic Englishから発想のヒントを得たと言われている。Basic English自体はControlled Language、あるいはControlled Englishと言われることはないようだが、Basic Englishの基本的な枠組みはのちの制限言語、制限英語に受け継がれていると考えることができよう。

制限言語の長所は簡潔明瞭で読みやすいこと、理解しやすいこと、人手あるいは機械による翻訳の対象として適していることなどであるが、同時に、制限を加えることにより“power of expression”（表現の力強さ、迫力）が失われること、文章を書く際に語彙を選び文法、文体に留意する必要から時間がかかること、書き手に相当の熟練が求められることなどの、Basic Englishの場合にやや似た短所がある。

書き手の訓練については専門ライター養成のための教材等も開発され、各種の研修コースなどで利用されているようである。また、より優れた制限言語、制限英語の研究開発を目的とする国際会議、国際セミナーなども各地で開かれている。

本稿はBasic Englishと関連させて二、三の制限英語について述べるのが主旨であるが、ついでに一種の制限言語と考えられる日本語の例に触れておく。英文学者であった土居光知(1886～1979)はBasic Englishが日本に紹介されて間もなく、その考え方に触発されて独自の「基礎日本語」を考案したといわれる。当時はマスコミで使われる日本語に漢語が多く、一般庶民の日常語との隔たりが大きかった。彼らに平易な日本語を提供すること、また、当時の朝鮮、台湾の人々の日本語教育に役立てることが考案の意図にあったといわれる。基本語彙は1000語で動詞の数もかなり制限したものであったらしい。

1988年頃、国立国語研究所は当時の野元菊男所長の主導で、日本語を学ぶ外国人のために「簡約日本語」と称する制限言語の開発を始めた。外国人の初心学習者にとって日本語の動詞はその活用が難しいので活用形は連用形のみとし、語尾を「ます」、「です」調に統一すること、語の意味は一語につき三つまでとすることなどがそのポイントであった。次に寓話「北風と太陽」の野元所長訳の原文とその簡約日本語訳を示す。⁽⁵⁾

〈13〉 まず北風が強く吹き始めた。しかし北風が強く吹けば吹くほど、旅人はマントにくるまるのだった。遂（つい）に北風は、彼からマントを脱がせるのをあきらめた。

〈14〉 まず北の風が強く吹き始めました。しかし北の風が強く吹きますと吹きますほど、旅行をします人は、上に着ますものを強く体につけました。とうとう北の風は彼から上に着ますものを脱ぎさせますことをやめませんとなりませんでした。

この例にみられるのは制限というより、むしろ加工、改変であり、かえって外国人学習者を困惑させるのではないかと思われ

る。訳文の第三文などは滑稽な感じがする。

3. AECMA Simplified English

1979年に欧州航空会社連合 (Association of European Airlines) が航空機メーカー側の欧州航空宇宙工業連合AECMA (European Association of Aerospace Industries) に対して、メーカー側から出されて民間航空業界で使用する航空機のメンテナンス用のマニュアルや各種文書の英語を誤解を生じない簡潔で分かりやすいものに改善するよう要請した。AECMAはアメリカ航空宇宙工業連合 (Aerospace Industries Association of America) に航空業界用の制限英語開発プロジェクトに参加を求め、1986年にはAECMA Simplified Englishと称する制限英語の手引書をまとめた。

航空業界ではそれ以前に各社個別に使用言語である英語の文体や専門用語の標準化に努めており、マクドネル・ダグラス (McDonnell Douglas) 社が専門用語辞典をつくり、エアバス社 (Airbus Industrie) が標準文例の一覧をまとめた例はあった。しかし、1986年の手引書で提案されたSimplified Englishは広く航空業界全体にわたって使用される標準的、統一的な言語となることを目指したものであった。航空機のメンテナンス、修理に当たる作業員、技術者たちの多くは英語が母語でないため英語能力が十分でない人たちであろう。また、文書を別の言語に翻訳する場合も原文が制限英語であれば翻訳作業も容易となろう。AECMA Simplified Englishは航空業界に流通する技術文書の良質化を目的にしたものである。

AECMA Simplified Englishの基本語彙は特殊な技術専門用語を除き約180語の動詞を含む950語で、各語はそれぞれ厳密に定義され、一語には一つの意味しか与えられていない。また、一語は一品詞で使用される。文の長さ、

動詞の用法、能動態の使用などに関する約55の規則がある。次に実例を示す。〈15〉、〈17〉が原文、〈16〉、〈18〉が書き直した例である。⁽⁶⁾

〈15〉 The A319s will seat 135 passengers and the A321s accommodate 190, while the existing A320s offer seats for 159 passengers in a typical Air France "European configuration".

〈16〉 The A319s will have 135 seats and the A321s will have 190 seats. Air France's A320s, in their "European configuration", have 159 seats.

〈17〉 It is equally important that there should be no seasonal changes in the procedures, as, although aircraft fuel system icing due to water contamination is more often met with in winter, it can be equally dangerous during the summer months.

〈18〉 Use the same procedures all the time because water in the fuel system can freeze during summer or winter.

AECMA Simplified Englishはもともと航空業界で生まれたものであるが、石油工業、トラック、列車、ディーゼル・エンジン等の機械製造業においても使用され始めているようである。

4. Plain English

私どもは日常生活において意味内容の理解しにくい文書に出会うことがたびたびある。法律関係の文書、企業や団体の定款、契約書、機械類の説明書からちょっとした申請書の記入上の注意書きにいたるまでその例は多い。

1979年、英国リバプールに住む主婦クリッシー・メイア (Chrissie Maher, 1938~) が英語で書かれた公文書などの表現を読みやすく分かりやすいものに改善することを目標にかかげる啓蒙運動の主導者となり、その運動を通して広めようとしたのが Plain English と呼ばれるものである。

メイア自身成長期に十分な教育を受けられず、行政機関などの一般向け文書の理解に難儀していたが、自分の周囲にいる教養ある人ですら、例えば福祉給付金申請書の記入に当たって、そこに書かれた英語表現の難解で不明瞭なことに困惑していることを知り、堅苦しく難解な表現 (gobbledygook) を排除した平易な英語のあり方について世論を喚起しようとした。やがて同志を集め、英語表現改善を目的とする団体を設立、自らその主導者となって強力なキャンペーンを展開する。

この運動が文書の改善を求める対象は政府及び地方の行政機関、保険会社、法律関係の団体、銀行、医薬品企業等々の、一般庶民の生活に直接かかわるところであり、そこから出される文書の英語をはじめとし、日常の掲示文にいたるまで、平易なものに改めさせようとするのである。この運動はその後しだいに英国各界に広まり、着実な成果をもたらし、やがて政府自体もこのキャンペーンの趣旨に沿って政府関係公文書のおおがかりな点検を行うことになる。

Plain English は格式語や特殊用語 (jargon) を避け、日常の語彙を使用して可能な限り平易で明瞭な表現を採用する。そのための指針として、語については格式語の代わりに日常語を使うこと (例えば, alleviate は ease に, ascertain は find out に, commence は begin に), ラテン語やフランス語のフレーズを避けること (per annum は annually にするなど), できるだけ能動態を使うこと, 一文の長さは 15 から 20 語程度にすること, (ある販売契約書には一文が 513 語から成る例があっ

たそうである) などを挙げている。

Plain English は制限語彙数を定めていない。しかし、他の面で英語の使用に一定の制限を加えていることは事実であり、やはり一種の緩やかな意味での制限英語とみなしてもよいであろう。また、Basic English からヒントを得たという形跡はない。しかし、Ogden と Richards が明晰な思考のためには情緒性を排した明確なことばの使用が必須であると考えたのと、メイアが日常生活には明瞭で平易なことばの使用が重要であると考えたこととの間には一脈相通じるものがあるように思われる。

次に具体的な事例として、仰々しく堅苦しい英文と書き直した Plain English の英文を示す。〈19〉、〈21〉は原文、〈20〉、〈22〉は書き換えられた英文である。(7)

〈19〉 High-quality learning environments are a necessary precondition for facilitation and enhancement of the ongoing learning process.

〈20〉 Children need good schools if they are to learn properly.

〈21〉 Your enquiry about the use of the entrance area at the library for the purpose of displaying posters and leaflets about Welfare and Supplementary Benefit rights, gives rise to the question of the provenance and authoritativeness of the material to be displayed. Posters and leaflets issued by the Central Office of Information, the Department of Health and Social Security and other authoritative bodies are usually displayed in libraries, but items of disputatious or polemic kind, whilst not necessarily excluded, are considered individually.

<22> Thank you for your letter asking permission to put up posters in the entrance area of the library. Before we can give you an answer we will need to see a copy of the posters to make sure they won't offend anyone.

書き換えられた文はなにかあっけない印象を与えるが、要するに原文はこの程度の内容しか含んでいないというか、この程度で十分用が達せられるのである。原文の仰々しさは一つには抽象度の高い多音節語の多用による。このような文は“inform”するより“impress”するのがそのねらいだといわれても仕方がない。

英国の作家ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903~1950) は英語使用のあり方について深い関心を持っていた。彼は評論「政治と英国の言語」(“Politics and the English Language”)の中で悪文と考えられる五つの文を示した。その第一番目が英国の政治学者ハロルド・ラスキ (Harold Laski, 1893~1950) の次の文である。(8)

<23> I am not, indeed, sure whether it is not true to say that the Milton who once seemed not unlike a seventeenth-century Shelley had not become, out of an experience ever more bitter in each year, more alien (*sic*) to the founder of that Jesuit sect which nothing could induce him to tolerate.

これはかなり長いが一文である。最も特徴的なことは、この文の中に否定語が五つある。否定の接辞も一つある。同一文中にこのように否定語がいくつも重なると文意が非常に理解しにくくなる。しかし、この種の文が一般人を対象に書かれたものではなく、学者、専門家を読者に想定して書かれたものであれば

特にその欠点をあげつらうこともないかも知れない。この種のもの、また文学作品などを Plain English は批判の対象にしないのである。

Plain English キャンペーンのウェブ・サイトでは一種の PR としてウェブ・ページの閲覧者から問題のある英文のいわば添削を受け付けていた。私があえてこの文のエディットを依頼したらキャンペーンの中心人物の一人で、クリッシー・メイアの長男のジョージ・メイア (George Maher) から折り返し電子メールで返事があった。この種の文についての依頼はめずらしいと述べて、次のようなリライト文が示してあった。(9)

<24> It seems to me that Milton, who was once like a 17th Century Shelley, had increasingly bitter experiences each year. These experiences alienated him from the founder of the Jesuits, who he could no longer tolerate.

この添削例では原文が二文に直されていて、否定語も一語だけである。ニュアンスの差はともかく、この文の方が原文よりよほど理解しやすい。

5. VOA Special English

VOA (Voice of America) はアメリカ連邦政府機関の米国海外情報局 (United States Information Agency) が運営する海外放送でその歴史は古い。現在はニュースを中心としながら、政治・経済・社会・文化などに関する解説番組、各種教養番組、音楽番組などを英語のほかにも数多くの言語で海外向けに放送している。

VOA は英語が母語でない外国の人々、また、外国語としての英語の学習途上にある人々を対象にした英語放送の実現に向けて準備を進め、1959年10月、中東向けに Special

Englishと称する英語による放送を試行的に開始した。聴取者の反応はきわめて良好で、自信をつけた VOA はやがて全世界に向けての Special English の放送にふみきった。全放送時間の中で Special English の占める割合は当時も今も限られたものであるが、その人気は衰えることがないという。特に中国で英語を学ぶ学生間の人気にはこれまで瞠目すべきものがあったといわれる。

この Special English も一種の制限英語であるといってよいだろう。使用語彙は頻度の高いもの約 1500 語とし、文もなるべく短かめにして、かつ一文一アイデアを原則とすることになっている。Special English は音声英語である。制限英語としての Special English の最大の特徴はその放送のスピードであろう。通常の VOA 放送は一分間当たりの語数が約 130 語とされるが、Special English では約 90 語であるといわれる。スピードを遅くしても英語の自然なリズムがくずれていないことは聞けばすぐ分かる。

VOA のニュース放送で普通の英語によるものと Special English によるものを同一のニュース項目について比べるために次の例を示す。〈25〉は普通の英語、〈26〉は Special English である。(10)

〈25〉 Nearly forty hooded Mexicans have ransacked a McDonald restaurant in Mexico City to protest a California proposal to deny many services to illegal immigrants in the United States. The men overturned tables, spray-painted walls and flung pamphlets opposing the initiative known as Proposition 187 before fleeing on foot. The initiative would deny school, health and other state services to illegal immigrants in California. It provoked several demonstrations in Mexico and Central America.

〈26〉 About forty Mexicans have raided a public eating place in Mexico City to protest an election proposal about refugees in the western American state of California. The demonstrators overturned tables, painted walls and gave out pamphlets opposing the measure. If the people in California approve the measure, it will deny school, health and other state services to illegal refugees in California. The proposal has incited other demonstrations in Mexico and Central America.

(ちなみに、〈25〉、〈26〉はともに語数が72語である。録音でdeliveryの時間を調べてみると、〈25〉は約30秒、〈26〉は約46秒であった。単純に計算すると、〈25〉は一分間当たりの語数が144語、〈26〉は94語となる。)

私はこれまでの10年余、時事英語に関する科目を担当してきた。そして当初この科目の目標を二つに絞った。学生を英字新聞に親しませることが一つで、もう一つは英語のニュースに慣れさせることであった。以後、ずっと今日までこの二つを目標として授業を続けてきた。英語のニュース放送として何を利用するかを考えた時に思いついたのが VOA Special English のニュースである。というより、VOA Special English があったから二つ目の目標を考えたというのが正しいのかも知れない。

VOA 放送はもともと短波による放送で、今日でも短波が伝播手段の主流となっている。しかし、最近になってインターネットによる放送も始まった。インターネットによる放送は短波放送にありがちな雑音は皆無で音質もきわめてよい。ニュース以外の Special English による番組は VOA のウェブ・サイトでそのスクリプトを読むことができるし、もちろんプリント・アウトも可能である。また、使用語彙 1500 語のリストも取り出せる。

英語学習者あるいは英語の再学習者にとっていわば音声と文字による教材が毎日手に入るわけである。なお、ニュース以外の放送内容を素材にした大学生向けの英語テキストも何種類か日本国内で発行されている。†

6. フィクションの中の制限英語 “Newspeak”

ジョージ・オーウェルが英語について強い関心を持っていたことはすでに述べた。彼は第二次大戦後間もなく「1984年」(*Nineteen Eighty-four*, 1949)という反ユートピア小説を発表した。この作品に描かれるのは徹底した独裁国家のもとで Big Brother と呼ばれる最高指導者とその部下たちによって人々が完全に自由を奪われ、奴隷化される社会である。人々から思想、表現、政治活動などの自由を剥奪し、ひとにぎりの指導者に隷属させる方策の一つとして、この社会では独特の言語政策が採られる。この社会のもともとの言語は英語であった。英語は依然として日常語として使われているが、指導者たちはこれを“Oldspeak”と称し、これに代わるものとして彼らは“Newspeak”という新しい言語体系を創りだしてその使用をなかば強制する。そして Newspeak の使用はしだいに拡大され、2050年頃までには完全に Oldspeak にとって代わるものと予想されている。この Newspeak という言語はきわめて特殊な制限英語であるとみなすことができる。

制限英語は特定分野で特定目的の使用のために通常の英語を母体として創られ、通常の英語と並存するものであるが、この小説の世界では制限英語がその社会の唯一の言語となっていくのである。

現実の世界ではこのようなことは起こり得ない。この作品は全体主義社会についての風刺小説であり、オーウェルは社会における言語の役割を風刺の対象としたのである。彼は

人間の思考に対する、ことばの持つマイナスの作用、つまりことばが特定イデオロギーのもとで人間をいわば洗脳し、徹底的に支配する恐ろしい手段となり得る可能性を描いたわけである。Newspeak は Oldspeak に極端な制限（と言うより、むしろ改変）を施し、それによって人々の自発的な思考を抑制し、“Ingsoc”というイデオロギーの浸透にのみ奉仕する企てである。Newspeak の語彙には free という語はあるが、その意味は、例えば、*This dog is free from lice. The field is free from weeds.* における free の意味に限定され、politically free, intellectually free の意味は存在しない。

オーウェルは全体主義社会における言語の問題についてよほど強いこだわりがあったとみえて、この小説の巻末に「Newspeak の諸原則」という表題で10ページ余りの付録をつけている。この中で彼は Newspeak の全体に関するおおまかなスケッチを試みる。詳細は省略するが、語彙はA, B, Cの三グループに分けること、接辞、屈折による独自の造語法、複合語の多用、品詞の互換性などを説明する。もっともこれは現実ばなれしたフィクションの世界のことであって一種の知的遊戯に過ぎない。

Newspeak で書かれた文は普通の英語に比べればきわめて異様でほとんど意味不明である。小説の冒頭部分に出ている例を次に示す。〈27〉が Newspeak の文で、〈28〉はその意味として考えられると作者が示すものである。(11)

〈27〉 times 3.12.83 reporting bb dayorder
doubleplusungood refs unpersons rewrite
fullwise upsub antefling

〈28〉 The reporting of Big Brother's Order for
the Day in *The Times* of December 3rd 1983
is extremely unsatisfactory and makes
references to non-existent persons. Rewrite

it in full and submit your draft to higher authority before filing.

オーウェルのNewspeak はOgden のBasic English のパロディーであるとみなされたこともあったらしいが、オーウェル自身はBasic English をかなり高く評価していた。Newspeak は Basic Englishの対極にある。オーウェルは個人の自由も自発性も失われた社会の言語を Newspeak を考えだして戯画化したのである。

結 び

①制限言語，制限英語の研究開発は今日特に機械類の製造業界を中心に盛んに行われているようである。仕様書，操作及び点検マニュアル，PR 文書などの言語が明瞭で曖昧なところがなく分かりやすいことは企業の競争力の強化につながるという認識が広まったからである。すぐれた制限言語は機械翻訳における入力文の事前処理を容易にするし，人手による翻訳の場合でも労力とコストが省ける。制限言語の研究開発は自然言語処理や機械翻訳の技術の進歩を背景にして言語工学 (language engineering) という研究分野を生み出した。

制限言語，制限英語によって書かれた文書が定められた語彙，文法，文体などの基準に一貫して沿ったものであるか否かをチェックするソフトウェアの開発も 1990 年頃から始まり，情報産業に携わるいくつかの企業はすでにチェッカーを製品化している。最近EU 委員会はヨーロッパの多言語圏でのビジネス・ニーズに応えるため，そのようなツールの開発に対する財政援助を決めたという。

新しい制限言語，制限英語やそれに対応したチェッカーなどの開発とプロモーションを

専門とする企業，機械翻訳及びその関連分野で顧客の要望に応じた研究開発を進める企業が最近増えているようである。ニューヨークに本拠を置くスマート・コミュニケーションズ (Smart Communications, Inc.) などはその代表格かも知れない。この会社は独自の制限英語を開発し，日本のメーカーに売り込みを図っている。

制限言語，制限英語に関連する諸問題は「産業情報」の研究領域に新しく，きわめて刺激的な研究トピックを提供しているように思われる。

② Plain English Campaign は市井の一主婦の呼びかけに端を発した一種の市民運動であったが，その趣旨の賛同者の広がりははしだいに大きくなり英国政府を動かすまでになった。そして今やアメリカをはじめ英語圏の数カ国でもこの運動の展開がみられる。クリントン大統領は一昨年 (1998年) 連邦政府の一般人向け文書に “plain language” を使用するよう提唱した。

日常生活の中で接する文書のことだが，例えば医薬品のラベル一つにしても，平明で誤解を招かないものが望ましいことは当然である。なお，法律関係者の間では Plain English に対する抵抗感が根強いともいわれるが，それでも最近では一部の法律家の間からいわゆる “legalese” 排除の動きがあるようだ。

③ Basic English を含め言語教育における制限言語は入門期に取り入れるものとして十分ふさわしいものかどうか，また，通常の対象言語の学習への移行の際に齟齬が生じることなくスムーズにつながるかどうかは問題として残るであろう。なお，しばしば聴解能力の不足が日本人英語学習者の弱点とされるが，聴解訓練には映画などより VOA Special English の放送の利用が効果的だと思われる。

引用文注記

(*) 本稿は2000年2月2日に行われた定年退官記念最終講義をもとにしている。

- (1) いずれも相沢 (1995) に拠る。
- (2) Basic English 訳は高本 (1982) に拠る。
- (3) Basic English 訳は相沢 (1995) に拠る。
- (4) いずれも相沢 (1995) に拠る。
- (5) いずれも「朝日新聞」1988年2月27日号から引用
- (6) Kathy Barthe 提供の資料から引用
- (7) Plain English Campaign のウェブ・サイトに掲載されたものから引用
- (8) Orwell (1946) から引用
- (9) John Wild 発信のGeorge Maherからの私信から引用
- (10) いずれも 1994年11月8日のVOA放送から採録
- (11) いずれも Orwell (1949) から引用

なお、Basic English に関する用語は石橋 (1973) に、また文例以外のいくつかの語句の用例は相沢 (1995) 及び高本 (1982) に拠る。

- † 例えば、VOA *Everyday Science* 1, 2, VOA *Science Report*, VOA *Space and Man* を含む8点 (南雲堂) のほかに、VOA *Workbook on Rhythm and Intonation* (松柏社) などがある。

参照した図書等

1. 相沢佳子、「ベーシック・イングリッシュ再考」、リーベル出版、1995
2. 朝日新聞、「日本語 です・ます調に直します」、1988年2月27日号
3. 石橋幸太郎 (編)、「現代英語学辞典」、成美堂、1973
4. 高本捨三郎 (編)、「英語学・英語教育研究辞典」、南雲堂、1982
5. Bolton, W.F., *The Language of 1984 Orwell's English and Ours*, Basil Blackwell, 1984
6. Crystal, David, *English as a Global Language*, Cambridge University Press, 1997
7. Crystal, David, *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, Cambridge University Press, 1997
8. Cutts, Martin, *The Plain English Guide*, Oxford University Press, 1995
9. Fitzgerald, Ingrassia Merni, *The Voice of America*, Dodd, Mead & Company, 1987
10. *Mainichi Daily News*, "Law Experts: Cut Legalese, Write Plain English", November 29, 1999
11. O'connor, Peter, "The Weapon of Language: Basic English and the Battle against Obscurantism in the Years of Anglo-Japanese Alienation", in *Studies in English Literature*, The English Literary Society of Japan, 1998
12. Ogden, C.K., Richards, I.A., *The Meaning of Meaning*, 4th Edition, Harcourt, Brace and Company, 1946
13. Orwell, George, "Politics and the English Language", 1946, in *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Volume 4 1945-1950, Penguin Books, 1971
14. Orwell, George, *Nineteen Eighty-four*, 1949, Penguin Books, 1987

15. Plain English Campaign, *Born to Crusade One Woman's Battle to Wipe out Gobbledygook and Legalese*
16. *The General Basic English Dictionary*, The Hokuseido Press, 1992

検索したウェブ・サイト

1. AECMA European Association of Aerospace Industries (<http://www.aecma.org>)
2. Controlled Languages Home Page
(<http://salto.let.uu.nl/www/Controlled-languages/HOME.html>)
3. Plain English Campaign (<http://www.plainenglish.co.uk/>)
4. Smart Communications (<http://www.smartny.com>)
5. VOA (<http://www.ibb.gov/>)
6. VOA Special English on the Internet (<http://www.voa.gov/special>)

私信による情報及び資料提供者

1. Allen, Jeff (jeff@elda.fr)
2. Barthe, Kathleen (kathleen.barthe@avions.aerospatiale.fr)
3. Montague, Paul D. (Paul.Montague@PSS.Boeing.com)
4. Moser, Leo J. (acadon@inreach.com)
5. Smart, John (jsmart@smartny.com)
6. Wild, John (jwild@plainenglish.co.uk)